

沈黙のかわりに

五十年入学 稲賀 繁美

十月二十八日ようやく受け取った『赤門』に目を通し、おそまきながら島田先生の思い出にふける。はや一周忌。昨年の今ごろ石田俊正君からその逝去を伝えられた時には、思わず憤死といふ言葉が脳裏をよぎったものだが、今日こうして幾つかの追懐を読む機会を得、改めて感じるところあつて、思い定かならぬままに筆をとっている。

今にして島田さん——あえてそう呼ばせていただく——に読んでみていただきたいと思う本がある。モリス・パンゲ著『自死の日本史』。正直申して小生には重きにすぎると本であつて、某誌に自らの知らぬ間に意に反した「書評」を掲載されて、実はにがりきつているのだが、果して島田さんはこの本をどうご覧になったことだろうか。

著者パンゲ氏を島田さんにひきあわせることなど問題外であつたらうけれど、今にしてその架空の対談が、時として夢の中に忽然現われる。今の若い世代にはもはや理解を越える主題であるだけに、このフランス第一級の知識人の入魂の一書に対する島田さんの、同世代人としての共感と反感とがいかなるものたり得たかを知りたく思う。それが夢でしかないことはよく心得ているつもりだ。遭された者には夢をはぐくむ権利がある。

自らを殺すことで島田さんが我々に示したのは、もはや彼の道は我々には残されていないということだ。跡に連なることを拒絶する師の内こそ究極の暖かさと寛容とのあることは、諸兄が既にその文中につづられたところである。淵君の文章にならぬ文章の内に、とりわけ小生はその含蓄を汲み得て、幸とする。

ひとつ島田さんのまねをして、言いたい放題を言ってみようか。平間君の文章を読んで、伯楽は名馬を得てこそ、と思った。島田さんの一語は平間君の一生を裏から支えるであらうし、そこまで見込まれた平間君に対する羨望もおさえ難い。実はもうそれで言い得る実のある事柄など尽きている。であればこそ失礼をおそれずあえて申そう。冥福などという言葉を祈りの端にものぼせぬ山田さんの察気に、自分には不可能と悟りつつも、この上ない共感を抱いたことを、島田さんの死なくして稲葉先生に大成はあるまいと思つたことを、これも自らの恥を忍んであえて申す。刎頸の友を失うにこそ田中師範の人徳ありと、そして藤森さんの沈黙にま

さる重みはあるまいと。

一昨年、短期帰国した折は、まことに恥づべきことに、田中先生のお宅におじゃまする機会を得なかつたばかりか、既にご隠居の身の島田さんにお会いする席も設けなかつた。が、それだけに、島田さんは以前とかかわらずいつまでも日本に棲んでおられる。この感覚は、外国に何年も暮し、親不孝も承知で何年も父母に会わぬ体験を若いうちにした者にしかわかるまい、とも思う。別れなどない。出会いはあるのみである。島田さんに出会えた人生というもの、島田さんが幽明の境を異にしたとて、何らかわるものではない。心は常に居ます。

島田先生と親しく酒を交した覚えは、実は一度しかない。現役最後の夏合宿で、そこは最上級生の特権、田中先生のところにおじゃまして、ビールを頂戴していた折のことだ。島田先生ひとり水筒にウイスキーをつめて持参しておられ、お湯わりにして召し上がっていた。調子にのつて、お相手をした。翌朝のトレイニングがひどく苦しかった思い出がある。だがそんな明日への配慮など何になつたらう。それは至上の時だつただから。もつとも恥づべきことに何をえらそうにしゃべっていたものか、とんと記憶がない。ただ稲葉は見どころがある、話がわかる、といわれてはじめて、軽率な自分の舌が選ぶべき言葉に迷い始めたことばかり、ひどくなつた。酒にたよらねば対等の立場に立てず、あるこ

とないこと大ぼらを吹く虚勢の内におのずと現われる自分の格のほどというものに、思い返して慄然たるのみである。

手をとって技を教えていただいたことも一度しかない。二年の夏合宿の折で、道場で血しぶきをあげ、あまりのナマ臭さにさしもの田中先生をして困惑せしめる醜態をさらしていた小生であったが、そのいささか常規を逸した学生を島田さんは実は遠くから見つめておられたのだった。ふだんは運動をするでもないご様子の島田さんが、ふと歩みよられて、これはこうやるんだよ、と三教のきめをかけて下さった。全く力も入れておられぬのに文字通り金縛りにあつた如くで、とりたてて痛みも感じないだけに誠にきつねにつままれた思いであつた。いったいどういう稽古をされたのか、畳の上を一陣の風が過ぎ、至福を思つた。もつともその技はついにその後体得することを得ない。

やはり現役最後の夏合宿のことであつたか、自分で今さら顧るにつけても不思議なほど気力の充実していた頃であつたが、それに体も技もついてゆかぬのは常の如くで、何かの拍子に足の親指のつめを剥いてしまった。強がりやを言つて稽古をつづけようとしていると、この時も、それまで道場の反対はしにおられたはずの島田先生が、いつのまにかかたわらに立つておられ、と思うがはやいか、ついと、小生の足元にひざをつくや、「これは放つておくとあとがやつかいだ。休んで治療しなさい。」とおっしゃつた。いささか面喰つた。こんな程度、と思つていたからである。しか

しやさしい島田先生の言葉の奥には反論を許さぬ、きつぱりとした語調があつた。

一見豪胆にみえる志士のうちに秘められたこまやかな神経。実際先生のお言葉がなければ、体面上のことであつて無理をしていかに違いない。いかにも無茶を若人たちに押しつけているかにみえて、その実まことに細心で心得のある手綱さばきを、それとなく示される。尋常一様ならざる人生体験なくしては、よく人の為し得るところではあるまい。否、為さんとして為し得る「術」ではない、おのずとなる心であろう。世間でいわれる、ものわかりの良さとは、まことに無縁の度量であつたが、それは周囲にふりまく愛想ではなく、おのれの律を越えんとする者のみに、はじめで見ることが許される種類の配慮でもあつた。深慮とは無心である。

記憶の糸をたぐつて思い出されるあとひとつの光景は、三年の秋合宿のそれだ。夜稽古の際中に、酒香ふんぶんたる三大人が七徳堂に來場した。本田「コーチ」、藤森さん、そして島田さんである。本田「コーチ」の受け身つき回転四方投、藤森さんの垂直二等分線、そして島田さんの激突特攻隊、と、足元のみならず口元もはや定かならぬこの三人が三様の四方投を繰り出しては自説を力説されるままに、その日の夜稽古は時間大超過のうちに、あつという間に終つてしまつた。地獄のように長かつたと回想する者もあるのだが、とにかく、一体何が起つたのやら正確には稽古

をしている我々にもしかとはつかみがたき大混乱、さながら魔界からの大霊たちの闖入劇といった趣であった。今やなつかしいのみ。

思うに大学時代に非常識に接すること以外何を人生で学ぶことのあるか。もはや新たな道を模索する若き日々を^お畢え、道を定めて精進するしか現世には残されぬ身となった（石川芳明君ありがとう）今にして、後悔のほろにがさをふきとばさんがためにも、覚悟を新たにするばかりである。

合気道部来独と灰聞した。これを好い機会として、今しかできぬ稽古に打ち込んでいたきたい。大平の世の中、機を得て運命をひらくのも、一生何度とあることではない。ドイツ語にも精進し、武勇伝と子孫とを当地に残して故郷に凱旋していただきたいものである。（十二月十五日加筆）